天覧相撲と土俵入り

根　間　弘　海

1．はじめに[1)]

明治17年３月10日，天覧相撲が行なわれている。これは当時，沈滞気味だった相撲を活気立たせ，現在でも歴史的なイベントだったと評価されている。天覧相撲では勧進相撲に見られない特徴がいくつかあるが，本稿ではもっぱら行司に関連する特徴にポイントを絞り，天覧相撲と勧進相撲の違いを見ていく。これらのポイントはこれまであまり深く研究されてこなかったものである。ついでに，現在の土俵入りでは行司が先導したり，力士が観客のほうを向いて立ったりしているが，それがいつから始まったかも調べる。本稿で調べるのは，主として，次の８点である[2)]。

(a)　勧進相撲では立行司は帯刀していたが，天覧相撲ではどうだったか。

(b)　勧進相撲では行司の装束は麻裃だったが，天覧相撲ではどうだったか。

(c)　勧進相撲の横綱土俵入りでは行司が力士を先導するが，天覧相撲ではどうだったか。

(d)　勧進相撲の幕内土俵入りでは行司は力士を先導しないが，天覧相撲ではどうだったか。

(e)　勧進相撲の幕内土俵入りで力士が観客席の方を向いて立ち，行司が先導するようになったのはいつか。それは，同じ年月に始まったか。

(f)　天覧相撲で扇子を差しているのは立行司だけか。他の行司は何も差

さなかったか。

(g) 天覧相撲では烏帽子を被るが，勧進相撲ではどんな場合に烏帽子を被ったか。

(h) 現在の幕内・十両土俵入りの形式は昭和40年初場所から始まっているが，昭和27年秋場所とどのように違うか。

勧進相撲では明治17年当時，帯刀は，原則として，立行司だけに限定されていた。したがって，天覧相撲でも帯刀して不思議ではない。しかし，本稿では帯刀していなかったことを指摘する。勧進相撲の横綱土俵入りでは行司が横綱を先導していたが，天覧相撲ではどうだったか。天覧相撲でも勧進相撲と同様に行司が横綱土俵入りは先導していたことを指摘する。勧進相撲の幕内・十両土俵入りでは行司は土俵上で蹲踞し，力士の入場を待っていたが，天覧相撲ではどうだったのか。天覧相撲では，勧進相撲と違い，行司が力士の先導をしたことを指摘する。また，勧進相撲では行司は麻上下を着用し，無帽で裁いていたが，天覧相撲ではどうだったのか。勧進相撲では，天覧相撲と違い，風折烏帽子の素袍を着用して裁いたことを指摘する。

天覧相撲には，もちろん，勧進相撲に見られない特徴がある。たとえば，四本柱の色，水引幕の色，揚巻の色，屋根の有無，土俵入りの御前掛り，力士の呼び上げ，力士や行司の入退場等で，勧進相撲と天覧相撲では異なることがある。この中には行司が直接関わるものもあるが，本稿ではこれらについてはほとんど触れない。これらの特徴を知ろうと思えば，相撲の本で大体調べることができる。本稿では，こういった特徴についてはほとんど触れず，これまで相撲の本などであまり取り上げられなかった特徴について調べる。その特徴とは，行司に関連するものである。

2．行司の帯刀の有無

天覧相撲の帯刀に関しては，太刀持ちと同様に，行司も帯刀することになったという新聞記事がある。

「当日，梅ケ谷の土俵入りには剣山露払いをなし，大鳴門太刀持ちの役を勤め，行司は素袍烏帽子にて木太刀を帯するとのこと」(『読売』(M17.3.4))。

この「木太刀」は木刀のことである。この記事のとおりであれば，横綱土俵入りを引く行司は帯刀していたはずだ。しかし，庄三郎は短刀を差していない。差しているのは，扇子だけである。天覧相撲を描いた錦絵や絵図を見る限り，庄三郎は，多くの場合，帯刀していないからである。庄三郎は当時第二席で，庄之助の代理を務めている。本来なら帯刀すべきだが，やなり帯刀していない。庄之助は「これより三役」の相撲を裁いているが，庄之助を描いた錦絵では帯刀していない。

明治17年初場所の番付によると，４代庄三郎（後の15代庄之助）は庄之助に次ぐ第二席である。伊之助（７代）は明治16年８月に亡くなっている。与太夫（８代伊之助）は庄三郎に次ぐ第三席である。庄之助（14代）は病気だったが，天覧相撲では「これより三役」に登場し，その取組を裁いている。この庄之助は明治17年８月に亡くなっている。番付によると，庄三郎は明治18年５月場所で庄之助（15代）を襲名している。実質的には，それ以前から庄之助の役割を果たしていたに違いない。なお，与太夫は明治17年５月場所で（８代）伊之助を襲名したが，明治18年１月場所まで庄之助（14代）に次ぐ第三席だった。伊之助（８代）は明治18年５月場所から第二席になっている。すなわち，明治18年５月から庄三郎が15代庄之助を襲名して首席となり，８代伊之助がそれに次ぐ第二席となったことになる。

天覧相撲の模様を詳しく記述した「文字資料」はたくさんあるが，帯刀の有無に関して言及したものは一つもない。行司が烏帽子をかぶり，「素袍麻上下」の装束だったことは確認できるが，帯刀していたのかどうかとなると，「文字資料」では確認できないのである。したがって，それを調べるには，勧進相撲の場合と同様に，天覧相撲でも「絵図資料」を参考にしなければならない。

立行司は「熨斗目麻上下」を着用している。この装束では「横綱土俵入り」を引くことができる。勧進相撲であれば，帯刀も許される。天覧相撲で帯刀するかどうかは，その都度，検討したようである。明治17年３月の天覧相撲では帯刀していないが，他の天覧相撲では帯刀することもあるからである。たとえば，明治21年１月の弥生社の天覧相撲の錦絵では，伊之助は烏帽子を被り，帯刀している（『相撲大事典』(pp. 228–9)）。

それでは，なぜ天覧相撲で短刀を差していないだろうか。これには少なくとも２つの理由が考えられる。

(a)　天皇陛下の前で，短刀を差すのは遠慮した。

(b)　廃刀令以降，短刀を差すのが公式に認可されていなかった。

17年３月以外にも天覧相撲はときどき催されているが，行司は短刀を差している場合もある。明らかに短刀を差していないのは，明治14年の島津公別邸の天覧相撲である。短刀の有無は次の錦絵で確認できる。

・錦絵「豊歳御代之栄」，安次画，明治14年５月９日，酒井著『日本相撲史(中)』(p. 57)[3]。

梅ケ谷と若島の取組。行司は木村庄之助で，烏帽子素袍。剣は差していない。扇子も差していない。風折烏帽子・素袍を着用している。

この相撲の模様については『日日』(M14.5.14) でも詳しく記述してあるが，行司の帯刀については何も触れていない。土俵祭を行った3名の行司は「烏帽子素袍」を着用している（『日日』(M14.5.14)／『日本相撲史(中)』(p.56))。おそらく他の行司も同じ装束で取組を裁いていたに違いない。取組に先立って，境川横綱土俵入りがあった。露払い・勢，太刀持ち・手柄山だった[4)]。明治17年3月の天覧相撲はこの島津公邸の天覧相撲を見習ったかもしれない。

天覧相撲で帯刀していないのは，おそらく，天皇が相撲を観覧する特別な催しだからである。天皇を敬うあまり，刃物である短刀を差すことに抵抗があったかもしれない。実際は，短刀の中味は「竹光」なので，危険な代物ではまったくない。しかし，中身は開けてみないと分からない。短刀は，外見上，刃物である。要らぬ考えを起こさせないためには，短刀は外から見えないほうがよい。行司の帯刀には威厳があるはずだが，短刀は生き神のような天皇の前では要らない。短刀の中身が「竹光」であることが周知徹底していれば，行司は帯刀できたはずだ。実際，この天覧相撲の後では立行司は帯刀している。

それにしても，理解できないことが一つある。横綱土俵入りでは太刀が許されていることである。この太刀の中身も「竹光」だったはずだ。「真剣」ではないはずだ。太刀が許されれば，土俵入りを引く行司の短刀も許されてよさそうである。横綱土俵入りの太刀は威厳を保つための必須の代物として理解されていたかもしれない。それに対して，行司の短刀は危険性の高い代物として理解されたかもしれない。太刀持ちの太刀が許されたのに，立行司の木刀が許されなかったことに関しては，何か区別があったはずだ。この辺の事情を記した資料を探してみたが，当時の文字資料では見つけることができなかった。勧進相撲で許されていた行司の短刀が天覧相撲では許されていないのだから，その理由がどこかに記述されていてもおかしくない。

なお，太刀の中身は「竹光」ではなく，「真剣」だったという記述もときどき見受けるが，明治９年の廃刀令後，「真剣」は禁じられていたはずだ。もし「真剣」が正しければ，例外として認めるように請願したに違いない。太刀持ちのためにそのような請願をしたという資料はまだ見たことがない。現在でも，太刀持ちの太刀は「竹光」である。『大相撲』（H7.11）に昭和20年11月場所，「横綱土俵入りの太刀も竹光に代えた」（p.128）という記述がある。これが正しければ，明治９年の廃刀令後，ある時点で竹光から真剣に変わった可能性がある。

３．帯刀を描いていない錦絵

天覧相撲を描いている錦絵ではほとんどの場合，行司は帯刀していないが，中には帯刀しているものもある。まず，帯刀していない錦絵をいくつか，次に示す。

(a) 「天覧相撲　初代梅ケ谷土俵入り」(御届明治17年３月25日)，豊宣画。

この錦絵は相撲の本ではよく掲載されている。どの錦絵を指しているか明確にするために，参考までに『大相撲』（臨時増刊号，1965.9）の口絵や『相撲百年の歴史』の表紙カバーの錦絵であることを記しておく。この二つは大型判なので，相撲場の全景がよく分かる。

梅ケ谷横綱土俵入りでは露払い・剣山，太刀持ち・大鳴門である。庄三郎は土俵入りを引いているが，扇子を差している。帯刀はしていない。扇子の両面が平で，中央が竹で盛り上がっている。すなわち，扇子を折りたたんだ状態である。庄三郎の房は赤色である。

立行司以外の行司は，もちろん，短刀を差さない。これは勧進相撲でも同様である。したがって，土俵下で控えている誠道，庄五郎，庄治郎等は扇子を差している。錦絵では，庄五郎と庄治郎の扇子や短刀

は見えないが，立行司でないことから扇子だけだと推測できる。[5)] 位階によっては扇子さえも差さない行司がいたはずだ。

(b)「梅ケ谷藤太郎横綱天覧」，明治17年３月，緑堂画，山室所蔵。

露払い・剣山，太刀持ち・大鳴門。庄三郎は前を向いた姿勢で蹲踞しているが，短刀も扇子も差していない。これが実際の姿に近い絵かもしれない。庄三郎は朱房で，烏帽子を被っている。

(c)「御濱延遼舘於て天覧角觝之図」，御届明治17年５月19日，国明画，『季刊「銀花」夏の号(No. 62)』，表紙の錦絵。

梅ケ谷と楯山の取組，木村庄之助は帯刀していない。左脇腹の白いものが扇子なのかどうかはっきりしない。房の色は赤である。明確に木刀として確認できないことから，おそらく扇子であろう。『昭和大相撲史』(S54. 10，p. 23）にも梅ケ谷と楯山の取組みを描いた錦絵があるが，同じ錦絵の一部ようだ。

(d)「御濱延遼館於天覧角觝之図」，御届明治17年５月23日，国梅画，『大相撲昔話』，口絵／『相撲百年の歴史』(pp. 98–9)／『図録「日本相撲史」総覧』(p. 40)／池田著『相撲の歴史』(pp. 118～9)。

梅ケ谷の横綱土俵入りを描いた錦絵。露払い・剣山，太刀持ち・大鳴門。伊之助が何を差しているかは分からない。左側の腰から後ろのほうへ短刀の先が突き出ている様子がないので，木刀は差していないようだ。扇子だけを差しているに違いない。軍配房は赤色である。この錦絵は明治17年３月の天覧相撲を描いたものとしているが，それは正しくない。というのは，そもそも伊之助はこの天覧相撲に参加していなかったからである。勧進相撲で帯刀していたので，それをそのまま適用して描いたに違いない。したがって，この錦絵は天覧相撲で帯

刀が許されていたとする証拠にはならない。

(e)「浜離宮の土俵祭」，明治17年 3 月28日，豊宣画，『相撲百年の歴史』(p. 98)。

脇行司の与太夫は弓を持ち，扇子を差している。小刀は確認できない。祭司の庄三郎，脇行司庄五郎，土俵下にいる行司たちが何を差しているかは分からない。行司は全員烏帽子を被っている。

(f)「天覧相撲取組之図」，明治17年 4 月 1 日御届，豊宣画，堺市博物館編『相撲の歴史』(p. 76)。

楯山と梅ケ谷の取組。木村庄之助が「是より三役」の取組を裁いているが，差しているのは扇子である。行司は烏帽子を被っている。

(g) 大達と梅ケ谷の取組（油絵)，芳翠画，『相撲百年の歴史』(p. 100)。

油絵の日付が不明だが，『相撲百年の歴史』(p. 100）には明治17年の天覧相撲を描いたものとして扱っている。烏帽子を着用していることから，天覧相撲を描いている。庄三郎の帯刀は確認できないが，差しているようにも見える。錦絵の実物を見れば，帯刀の有無は確認できるかもしれない。たとえ帯刀が描いてあるとしても，それは勧進相撲の帯刀をそのまま適用したものである。

(h) 梅ケ谷と大達の取組，御届明治17年 6 月，『相撲百年の歴史』(p. 101)。

中改めは高砂。庄三郎は烏帽子を着用していないので，天覧相撲ではない[6)]。草履を履いているが，短刀は差していない。扇子も見えない。庄三郎は短刀を差すのが自然である。勧進相撲を描いたものであれば，庄三郎を正しく描いていないはずだ。庄三郎は立行司に昇格していたからである。

(i)　梅ケ谷と大達の取組，御届明治17年４月，国利画，『相撲今むかし』(p. 74)。

中改めは境川である。この錦絵は天覧相撲ではない。その証拠は，庄三郎が烏帽子を着用していない。さらに，庄三郎は草履を履いていない[7)]。なぜ草履を描いていないのか不思議だ。庄三郎が草履を許される以前の相撲だということもありうるが，日付から判断する限り，草履はわざわざ描いていないと判断してよい。

(j)「勇力御代之榮」，御届明治1？年？月？日，国明画[8)]。

梅ケ谷と楯山の取組を描いた錦絵。届け出の日付が一部欠けているが，天覧相撲の後で描かれたものである。明治17年３月から19年までの間に描いいたものである。木村庄之助は烏帽子で，草履を履いている。短刀は不明。房の色は紫房[9)]。

４．帯刀を描いてある錦絵

天覧相撲では帯刀していないはずだが，錦絵の中には帯刀しているものもある。そのような例をいくつか，次に示す。

(a)「天覧角觝之図」，御届明治18年５月，国明画，『相撲百年の歴史』(p. 18)／『相撲の歴史』(pp. 118–9)。

大達と剣山の取組。伊之助は帯刀している。房は赤色。扇子は差していない。烏帽子を着用していることから，天覧相撲に違いない。しかし，伊之助は明治17年３月の天覧相撲には，参加していない。この錦絵には，次のようなキャプションがある。

「この錦絵は赤絵と称してインクを用いて刷ったもので，必ずしも状景の真を伝えているわけではないが，好角家の版画師国明が聞き

書きを基に描いたものと思われる」(『相撲百年の歴史』(p. 18))

天覧相撲で剣山と大達の取組を裁いた行司は木村庄之助である。木村庄之助は大鳴門・西ノ海，梅ケ谷・楯山も裁いている[10]。この錦絵で問題になるのは，天覧相撲に登場しなかった式守伊之助が登場していることである[11]。これだけでも，この錦絵は明治17年３月の天覧相撲を正しく描いていないことが分かる。この錦絵は，与太夫（３代）が明治17年５月，伊之助（８代）を襲名した後に描いたものかもしれない。伊之助が帯刀しているのは，当時の勧進相撲の帯刀をそのまま天覧相撲に適用した結果である[12]。したがって，それは真実を反映していないことになる。

(b)「出世相撲一覧壽語録」の一コマ，御届明治17年９月10日，『四角い土俵とチカラビト』(岩手県立博物館製作・発行，p. 69)。

この錦絵の中には相撲の情景をこま切れに別々に描いてあるが，天覧相撲の一場面もその一つである。画面にわざわざ「天覧」と書いてある。横綱，露払い，太刀持ちの名前は書いてないが，化粧廻しの「家紋」から梅ケ谷横綱土俵入りの模様を描いてある。行司は木村庄三郎に違いない。この行司は烏帽子を被り，小刀を帯している。軍配房は朱である。この帯刀は事実を描いてあるだろうか。おそらく，そうではない。当時，勧進相撲では帯刀していたので，それをそのまま適用したに違いない。

このように，明治17年３月の天覧相撲を描いた錦絵を詳細に見てくると，行司の短刀に関して一貫性がない。つまり，帯刀していたのか，そうでなかったのか，はっきりしない。どの錦絵が事実を忠実に描いているかもはっきりしない[13]。当時の勧進相撲では帯刀していたので，天覧相撲でも帯刀姿で描いたものもあるようだ。天覧相撲では扇子を明確に描

いているにもかかわらず，短刀はそれを示唆するような描き方さえしていない。これは明らかに天覧相撲では扇子しか使用しなかったことを示している。

『読売』（M17.3.4）によれば，行司は木刀を差して登場することになっていたが，これは予測記事であり，結果的に，実施されなかった。錦絵を見る限り，そう判断せざるを得ない。最初は，行司の帯刀は勧進相撲と同じようにする予定であったが，後で考えなおし，扇子だけにしたはずだ。どのような経緯で短刀を差さなくなったかに関してはまったく分からないが，天皇陛下に対する人々の心情からある程度推測することはできる。戦前の天皇陛下に対する国民の気持ちは現在では考えられないほどであったが，明治時代でもそれは同じだったはずだ。相撲を天皇陛下がご観覧になることは，相撲界にとって言葉に表せないほど大変な栄誉である。短刀を差して悪いということはなかったが，竹光の帯刀であっても刃物に見えるものは遠慮することになったのであろう。しかも，廃刀令で「真剣」の帯刀は許されていなかったことから，誤解を招くようなことは避けたかったに違いない。立行司の短刀が行司の権威の印だということが分かるようになってくると，横綱土俵入りの太刀と同様に，のちの天覧相撲では帯刀できるようになった。

実際，この天覧相撲の後からは立行司の短刀も当たり前にようになっている。たとえば，次の天覧相撲では行司は帯刀している。

(a)　明治21年１月14日，「弥生神社天覧角觝之図」(明治21年５月日印刷)，国明画，酒井著『日本相撲史(中)』(p.92)／『相撲大事典』(pp.228–9)。

西ノ海と海山の取組。式守伊之助は烏帽子素袍。帯刀している。扇子は差していない。行司溜りで木村庄五郎と式守鬼一郎は烏帽子姿で控えているが，帯刀していない。

(b) 「延遼館にて相撲天覧之図」(明治24年５月？日印刷)，錦絵(私蔵)。

これは明治23年２月17日，偕行社の新築落成式で行われた余興相撲の一コマを描いたものかもしれない。西ノ海横綱土俵入り。露払い・一ノ矢，太刀持ち・鬼ケ谷。木村庄之助は烏帽子を被っていない。帯刀している。厳粛な天覧相撲でなく，勧進相撲形式で行った相撲なので，行司は帯刀しているかもしれない。

明治18年11月27日にも黒田邸で天覧相撲が行われている。この天覧相撲で，立行司が短刀を差していたかどうかは分からない。『日日』(M18.11.27／28)には出席者と取組の力士名は書いてあるが，短刀や装束については何も触れていない。大規模の天覧相撲でないことから，短刀は差していないと推測しているが，実際はどうだろうか。黒田邸の天覧相撲を描いてある錦絵があり，行司の左脇腹近くが明確であれば，短刀の有無は簡単に見分けられる。

３．天覧相撲の扇子

帯刀に関して言えば，明治17年３月の天覧相撲では差していない[14)]。天覧相撲を記述している文献を読むと，扇子や帯刀については何も言及されていない。錦絵でも扇子だけしか差していない。短刀を差している様子もない。確かに，天覧相撲と銘打った錦絵の中には行司の帯刀姿を描いたものもあるが，それは勧進相撲に基づいて描いたものである。つまり，当時，勧進相撲では帯刀していたので，それを天覧相撲にそのまま適したのである。

『朝野』(M17.2.24) には，次のように，天覧相撲は現在の勧進相撲様式で行いたいという記事がある。

「このたび相撲天覧あらせらるるに付き，その筋にて古式を取調べらるる由なるが，相撲の節会は久しく絶えけるより，旧記等も急に纏まり兼ぬる故，このたびは年寄の願いにより，すべて回向院勧進相撲の式を行う事になりたりとか聞けり。」（『朝野』（M17.2.24）[15]）。

この記事を読むと，天覧相撲でも帯刀して裁くような感じがする。しかし，相撲の模様を表した記事では，帯刀について何も述べていない。

天覧相撲の横綱土俵入りで庄三郎が短刀を差せなかったのは，庄三郎が「立行司」ではなかったからではないかという疑問が起きるかもしれない。天覧相撲が行なわれた明治17年３月当時，庄三郎は第二席だった。一枚上の伊之助（７代）が明治16年８月に亡くなっていたからである。庄三郎は天覧相撲で「侍烏帽子に熨斗目褐色の素袍」の装束だったことからも分かるように，木村庄之助と同様に，「立行司」として認められている[16]。木村庄之助（14代）は病気だったため，天覧相撲では「これより三役」の三番だけを裁いている。庄之助は横綱土俵入りを引いていない。その代りに，庄三郎が引いている。

それでは，木村庄之助は帯刀していただろうか。「これより三役」の三番を裁いたとき，帯刀していただろうか。もし庄之助がそのとき帯刀していたならば，横綱土俵入りを引いた庄三郎が帯刀しなかったのは「立行司」でなかったからであるということもできる。横綱土俵入りは，おそらく，当時でも「草履」を履いていればよかったはずだ。しかし，庄三郎は第二席で，木村庄之助と同様に，立行司だったのである。その証拠は「熨斗目麻上下」を許されていることである。この装束を許されると，勧進相撲では自動的に短刀も許される。庄三郎は勧進相撲で帯刀を許されていたにもかかわらず，天覧相撲では帯刀をしていない。これは天覧相撲ゆえに帯刀を遠慮したに違いない。

扇子は必ずしも帯刀の代わりではなさそうである。立行司が帯刀できな

いから，その代わりとして扇子を差しているはずだと思いがちだが，それは一面的な理解である。もし立行司だけが扇子を差しているなら，帯刀の代わりだと捉えても間違いではない。しかし，立行司以外の行司も扇子を差している。たとえば，誠道，庄治郎，庄五郎等は立行司でないが，みんな扇子を差している。勧進相撲では，明治 9 年の廃刀令後，立行司以外の行司は帯刀しなくなった。明治17年 3 月には，もちろん，これらの行司は帯刀していない。勧進相撲で帯刀していないのだから，天覧相撲でも何も差さなくてよいはずだ。しかし，天覧相撲ではこれらの行司も扇子を差しているのである。

立行司以外の行司の扇子は，身だしなみの一つとして捉えていたかもしれない。立行司にとっては帯刀の代わりであると同時に，身だしなみの一つでもある。扇子は懐に差し挟むか，手に持つのが普通だが，行司の場合は外からも見えるように左脇腹のほうで差し挟んだかもしれない。錦絵を見る限り，扇子は明らかに外からはっきり見えるようになっている。そのような挟み方に統一したようだ。どの絵師が描いた錦絵でも，扇子を差し挟んだ格好になっているからである。錦絵に描かれている行司たちは全員扇子を差しているが，実際は一定の地位にいる行司だけだったかもしれない。錦絵に描かれていない行司も参加していたが，その行司たちも扇子を差していたのかどうか，それを確認するすべはない。いずれにしても，扇子は必ずしも帯刀の代わりとして差していたわけではなかったようだ。

江戸末期には，勧進相撲でも行司が帯剣と共に扇子も差していることがある。これを確認できる錦絵をいくつか，参考のために次に示す[17)]。

(a) 「横綱授与の図」，寛政元年冬場所（2 日目），春英画，酒井著『日本相撲史(上)』(p. 167)。

木村庄之助は帯剣し，右手に扇子を持っている。扇子は腹の前で大きく開いている。

(b) 「雲龍横綱土俵入之図」，文久元年，国貞画，『江戸相撲錦絵』(p. 62)。

木村庄之助は帯剣と共に扇子も差している。

(c)「陣幕横綱土俵入之図」，慶応4年，国輝画，『江戸相撲錦絵』(p. 64)。
式守伊之助は帯剣と共に扇子も差している。

これらの錦絵から分かるように，扇子は帯剣の代わりというわけではなく，身だしなみの一つである。ただ，行司は自分の好みで扇子を自由に土俵上で携帯できたかもしれないし，帯剣が一定の地位の行司に許されたように，扇子にも何らかの制約があったかもしれない。行司の場合，どんな着用具でも地位と結びつくので，扇子といえども何らかの制約があったはずだ。帯剣にどんな制約があったかを調べれば，それに付随して扇子の制約も少しは推測できるかもしれない。いずれにしても，天覧相撲の扇子は突然現れたのではなく，江戸末期にも使用されていたものである。現在でも，行司は扇子を使用する場合がある。たとえば，新序出世披露や顔触れなどでは扇子が重要な小道具になっている。

5．行司の装束

現在でも，土俵祭りと取組では装束が異なる。土俵祭りは，基本的に，相撲の神に祈りをささげる祭りなので，それを執り行う行司は「神官」である。祭主は神社の神官と同じように独特の神官装束を着用している。取組の装束はもちろん，侍烏帽子に直垂を着用している[18]。それで，ここでも天覧相撲の土俵祭りの装束に関して簡単に触れ，取組の装束が勧進相撲のそれとどう違っていたかについて少し詳しく見ていくことにする。

(a)　土俵祭りの装束

天覧相撲の土俵祭りの祭主は木村庄三郎だが，装束は次のように記されている。

「木村庄三郎侍烏帽子熨斗目勝色（褐色(？)＝NH）の素袍東の花道より静静と出で下座場にて拝礼し，土俵に進み，溜りに入りて控える」(『角觝秘事解』(p. 12))。

脇行司は式守与太夫と木村庄五郎の二人である。二人とも「素袍烏帽子」である（『相撲史伝』(p. 243))。立行司でないので，おそらく「熨斗目」のない「素袍」だったに違いない。祭主と脇行司の装束が「熨斗目」以外で，どのように異なっていたかについては分からない。私自身が装束に関する知識が乏しいので，細かい点にはあまり注意していない。関心のある方は天覧相撲について記述してある本を紐解いてもらいたい。

(b) 取組の行司の装束

天覧相撲では，取組によって行司の装束が二通りに異っている。

「16番までの行司は肩衣にて勤め，その後の取組は烏帽子素袍にて勤む」(『相撲史伝』(p. 244)／『相撲大要』(p. 21))

下位力士の取組では肩衣の装束で，烏帽子を被っていなかったはずだ。しかし，上位力士の取組になると，行司は「侍烏帽子に素袍」を着用している。たとえば，木村庄之助は「従是三役」の取組を裁いているが，その装束は次のように記述されている。

「木村庄之助病中ながら押して出勤す。その出で立ちは侍烏帽子薄柿色に丸の内立澤潟紋付たる素袍に熨斗目合赤の重ねを着し，土俵に登る」(『角觝秘事解』(p. 16))。

同じ立行司の木村庄三郎も同じ出で立ちである。立行司でない行司たちは「侍烏帽子素袍」だが，「熨斗目」がなかったに違いない。

取組のために土俵に向かうとき，天覧相撲では勧進相撲にない作法があ

った。それは，基本的に，天皇に敬意を示す行為である。

「力士・行司共に土俵に出るときは，まず花道の敬礼所において玉座に向かい拝礼して進み，また退くときもまた同じく拝礼する」(『相撲大要』(p. 21)／『相撲史伝』(p. 244))

取組を終えると，行司は勝ち力士に花を差し出している。

「(前略) 勝ち得たる方へ行司団扇の上にお花を乗せ，頭の上にて勝ち相撲某と呼びながら二足ひさり差しだす。力士頂き，頭に指し，緩々と引き入る」(『角觝秘事解』(p. 13))。

天覧相撲では，横綱梅ケ谷の土俵入りを木村庄三郎が引いているが，庄三郎は扇子を差している。露払いは剣山，太刀持ちは大鳴門である。この横綱土俵入りは勧進相撲と全く同じで，露払いも太刀持ち[19]も土俵上にいる。太刀持ちの太刀は真剣ではなく，中身は竹光に違いない。明治 9 年の廃刀令で，立行司といえども「真剣」は許されていないからである。

拙稿「行司の帯刀」(2009) で，扇子と共に短刀も差していたはずだと記述したが，この記述は事実を正しく反映していないことを指摘しておく。後で，天覧相撲では短刀を差していないことが分かり，その記述が間違っていたことも分かった。

6．素袍烏帽子

天覧相撲では，風折烏帽子を被っている。この帽子は天覧相撲かどうかを見分ける目印になる。しかし，この風折烏帽子を被っていれば，天覧相撲だと決めつけてよいのかとなると，必ずしもそうではない。勧進相撲でも，横綱土俵入りの場合，風折烏帽子を被っていることがある。風見著

『相撲，国技となる』には，明治時代の立行司は明治42年６月の国技館開館後，土俵入りの場合に限って素袍烏帽子（コップ型の烏帽子）を被ったとある[20]。

「江戸時代の東京相撲（江戸相撲）の行司は，武士全般の準礼服であった裃を着用していた。当然ちょん髷を結っていたが，烏帽子は被っていなかった（裃のときは帽子類を被らない）。明治耳朶に入ると行司の髪形は洋風化の影響を受け，ちょん髷から洋髪や丸刈りに変わった。しかし，服は江戸時代と同じ裃だった。この装束がそれ以降ずっと続いていたが，国技館開館場所から立行司は裃の代わりに素袍を着用し，素袍烏帽子（素袍用の侍烏帽子）を被るように改められた。ただし，横綱土俵入りの時だけだった。」（『相撲，国技となる』（p. 122））

勧進相撲では，行司は無帽の「麻上下」姿で横綱土俵入りを引くのが普通だったが，ときには烏帽子を被って引くことがあった。明治42年６月の国技館開館前にもそういう土俵入りがときどき行なわれている。烏帽子は多くの場合，風折烏帽子だが，中には「素袍烏帽子」の場合もある。横綱土俵入りを描いた錦絵の中から，行司が烏帽子を被って引いているものを，参考までにいくつか次に示す

(a) 梅ケ谷横綱土俵入りの記念写真，明治17年，『大相撲昔話(13)』(p. 62)。
素袍烏帽子。行司は庄三郎。露払い・大鳴門，太刀持ち・剣山。
土俵では風風折烏帽子だったが，写真では皿のキャップ。

(b) 西ノ海横綱土俵入りの記念写真，明治23年３月以降，『大相撲昔話(13)』(p. 64)。
素袍烏帽子。行司は庄之助。露払いは朝汐，露払いは小錦。

(c) 錦絵「東西幕内力士土俵入之図」，明治24年１月，春宣画，『相撲百年の歴史』(p. 107)／『日本相撲史(中)』(p. 108)。

庄之助と伊之助は風折烏帽子。瀬平は袴。これは東西共同稽古場を建設し，それを祝う相撲だったので，立行司だけ風折烏帽子を被ったかもしれない。

(d) 錦絵「小錦横綱土俵入之図」，『図録「日本相撲史」総覧』(pp. 42–3)。

木村庄之助：風折烏帽子。明治29年３月，横綱になった。

(e) 錦絵「大碇横綱土俵入之図」，学研『大相撲』(p. 156)。

大阪相撲。吉岡一学：風折烏帽子。明治32年５月，横綱になった。

(f) 錦絵「大砲横綱土俵入之図」，学研『大相撲』(pp. 166–7)。

木村瀬平は風折烏帽子。大砲は明治34年５月，横綱になった。

(g) 錦絵「常陸山横綱土俵入之図」，堺市博物館編『相撲の歴史』(p. 78)。

木村庄之助：風折烏帽子。明治37年１月，横綱になった。

これらの錦絵から分かるように，国技館開館前にも勧進相撲の横綱土俵入りで烏帽子を被ることもあった。明治43年５月に行司装束の改正があったとき，立行司は侍烏帽子の直垂になり，その装束で横綱土俵入りを引き，取組を裁くようになった。風見氏が述べているように，国技館開館後，立行司が素袍烏帽子で横綱土俵入りを引いていたのではない[21]。明治17年にはすでにそのような装束姿を描いた錦絵がある。それ以前にもそのような装束はあったはずだが，資料ではまだ確認していない。

７．土俵入り

土俵入りには，横綱土俵入り，幕内土俵入り，そして十枚目土俵入りがある。横綱土俵入りは江戸時代から変わりなく，勧進相撲でも上覧相撲でも行司が露払いの先導を務めてきた。寛政３年６月の横綱土俵入りでは立

行司が先導していたかどうか必ずしも定かでないが，先導していたことを示す資料が少なくとも一つある[22]。『南撰要類集』の「南町奉行所」篇で，次のような記述がある。

「（前略）東より行司先立ち，関一人上の上へ横綱を締め，添え角力二人，一人は先立ち，一人は後より付添い罷り出で，中礼致す。添え角力は水手桶際莚に二人とも控え，関一人土俵入り致し入り候節は後より出で候。添え相撲先立ち，一人のものは後に付き，下座莚にて関一人中礼致し，行司もその後より引き申す候。
次に，西より関一人，同様に土俵致し候」

これによれば，行司は三人の相撲取りを先導している。つまり，横綱の前にいる相撲取り（露払いに相当）の前に行司がいる。さらに，現在と同じように，行司は土俵上で「差し添え」をしている。

「（前略）四つ目，関一人上の上に横綱を締め，行司差し添え土俵入り仕り候」

横綱が土俵入りしている間，前後にいた相撲取り二人は土俵下で待機している。横綱が土俵入りを済むと，土俵入り前と同じように，添え相撲二人は横綱の前後で退却している。行司もその三人の後に続いて退却している。

横綱の後ろにいた相撲取りが太刀を持っていたかどうかに関しては，『南撰要類集』でも何の記述もしていない。これは，太刀を持っていなかったことを示唆しているに違いない。太刀を持っていたならば，それについて何らかの言及があったはずだからである。

明治17年６月の天覧相撲では，勧進相撲と同じように，横綱土俵入りで

も行司が先導している。これは次の記述で確認できる。

「木村庄三郎先に進み，露払い剣山，梅ケ谷横綱，太刀持ち大鳴門方屋入り，一人土俵入り，別に変りたることなし。玉座に向かって両手を下げ拝啓し奉り後，形のごとくにす」(『角觝秘事解』(p.13))

明治14年5月9日の島津公別邸で行われた天覧相撲の横綱土俵入りでも行司は先導していた。[23)]

「境川浪右衛門横綱をしめ，一人にて土俵入りをなす。勢イその先に立ち，手柄山その太刀を持ち，木村庄之助これを行司したりき。」(『日日』(M14.5.14)／『日本相撲史(中)』(p.57))

勧進相撲の横綱土俵入りと天覧相撲の横綱土俵入りがすべての点で同じというのは不思議である。行司が先導するのは入場行進と同じだから，同じ作法でも仕方ないが，土俵上に上がってからの作法は何か違っていてもよい。相撲界は普通の勧進相撲と天覧相撲では何かと違いを際立たせる傾向があるので，横綱土俵入りでもはっきり指摘できる違いがないか調べてみた。しかし，そのような違いはまだ指摘できない。これは非常に珍しいことである。これからでも，横綱土俵入りで天覧相撲独特の作法を協会は考案したらどうだろうか。

次に，幕内土俵入りに移ることにする。十両土俵入りもあるが，行司の先導に関する限り，十両土俵入りと幕内土俵入りにはまったく違いがない。明治時代の勧進相撲の幕内土俵入りがどのようなものであったかは必ずしも定かでないが，行司は先導していなかったはずだ。[24)]というのは，江戸時代の勧進相撲の幕内土俵入りでは行司が先導している様子はないし，行司が先導するようになったのは昭和30年代初期からである。つまり，その間で何らかの変化がなかったならば，ずっと行司は先導していなかったと判断してよい。

明治17年３月の天覧相撲の幕内土俵入りで，行司が力士の先導をしたかどうかであるが，「先導していた」というのが正解である[25)]。これは次の記述で確認できる。

「（前略）幕外にて拍子木を打つと東の花道より木村直，団扇を目八分に捧げ，引き続いて力士九人出で，各々下座場にて拝し相進みて，行司溜りより上り入口より左り方手前より順に先へ四人並び，五人めは右の方先より手前へ順に四人並び，残る一人ねじろに上り礼をなし時に，一様に声をあげて四股踏み，定めのごとき振りあって，後ずさりに三足退いて次第に順に引き，右の方は丸土俵に踏み込み，三足退いて次第に順に引き，而して東西土俵入り残らず相済み」（『角觝秘事解』（pp. 12–3））

天覧相撲の幕内土曜入りで行司が先導することは，明治14年５月９日の島津公別邸で行われた天覧相撲でも見られる。

「東の方の幕内の力士は式守鬼一郎，西の方幕内の力士は木村庄三郎これを行司して土俵入りをなさしむ。これは玉座に向かい三行に居並びてこれを行いたり。」（『日日』（M14. 5. 14）／『日本相撲史（中）』（p. 57））

天覧相撲の幕内土俵入りでは行司が先導しているが，これは勧進相撲と大きく異なる点である。幕内土俵入りで，勧進相撲では行司が先導しないのに，天覧相撲で先導するのはなぜだろうか。天覧相撲では力士が土俵で独特の御前掛りをするからだろうか。勧進相撲は形式張らないが，天覧相撲は形式を重んじるからだろうか。土俵入りが力士の「顔見せ」なら，相撲の種類に関係なく行司が先導してもよいし，先導しなくてもよい。天覧相撲だけ行司が先導する必要はない。横綱土俵入りと同様に，相撲の種類に関係なく，行司が先導したほうがよいはずだ。要するに，相撲の種類に

よって行司が先導したり，そうでなかったりするには，それなりの理由があったはずだ。その理由を調べてみたが，そういうことを記述してある資料はまだ見ていない。今のところ，違いがあるという事実を確認しただけである。

勧進相撲の幕内土俵入りの形式について行司の視点から簡単に記しておく。行司は土俵上で蹲踞の姿勢をし，東西の力士の登場を待つ。最初に，東方力士が登場し，土俵入りを済まし退場する。続いて，西方力士が登場し，土俵入りを済まし退場する。その間，土俵上に蹲踞している行司は軍配房を左右に振り回す。同じ作法を東西力士の土俵入りの間も繰り返す。西方力士が退場した後，行司も退場する。現在は，奇数日は東方力士が，偶数日は西方力士が最初に土俵入りをするが，これは昔も交互に行なっていたかもしれない。時代と共に，土俵入りの形式も少しずつ違っているはずだが，どのように変わってきたかは分からない。

幕内土俵入りを行司が先導していたかどうかに視点を定め，その様子を資料で調べてみよう。多くの場合，資料は錦絵や絵図である。錦絵の場合，蹲踞している行司が後ろ姿で描かれていたり，顔を向けた姿で描かれたりしているが，それはどの方角から描いているかによる。つまり，背中姿の場合は土俵の北側から描いているが，前向きの顔の場合は土俵の南側から描いている。

(a)　『古今相撲大全』（宝暦13年）。

力士の土俵入りの絵図があり，行司は力士の登場を土俵上で蹲踞して待っている。力士は両手を大きく広げ，腰を左右に大きく揺らしながら進んでいる。行司が力士に先導をしたようには思われない。

(b)　『国技相撲の歴史』（S52.10），中絵（ページ記載はない）。

「享保元年８月，京都二条河原の興行，東西土俵入り」，行司は木村玉之助で，土俵に蹲踞し，東西力士の土俵入りを待っている。先導しているという感じはしない。力士を先導している行司もいないし，退

却する力士の後ろにも行司はいない。行司は裃姿。これに類似するポーズの錦絵がいくつもある。時代が変わるので，同じ作法で土俵入りしたかもしれない。

(c)「幕内土俵入り」の図，『相撲百年の歴史』(p. 60)／『人物大辞典』(p. 68)。

天明2年10月の土俵入りというキャプションが付いている。行司は木村庄之助で，土俵で一人蹲踞している。東西の力士名も詳しく記入されていることから，この絵はかなり具体的である。行司が二人いないことから，行司は東西の力士を先導していないはずだ。

(d)「幕内土俵入り」の図，春英画，『人物大辞典』(p. 19)。

寛政初年のころというキャプションが付いている。谷風，小野川，雷電等が描かれている。行司は正面を向いて，土俵上で一人蹲踞している。

(e)「勧進大相撲興行図」，春英画，『相撲浮世絵』(pp. 22–3)。

文化14年(1817)春場所。

(f)「勧進大相撲土俵入之全図」，豊国画，『江戸相撲錦絵』(pp. 142–3)。

弘化2年(1845)11月。

(g)「勧進大相撲興行之全図」，国貞画，『相撲大事典』(p. 33)。

文政12年春場所の顔触れ。この錦絵は，『人物大事典』(p. 173) では「文政末年」(東・阿武松，西・稲妻) となっている。

(h)「勧進大相撲興行之全図」，国芳画，『江戸相撲錦絵』(pp. 110–1)。

嘉永2年 (1849) 冬場所。

(i)「勧進大相撲土俵入之図」，芳幾画，『相撲浮世絵』(pp. 38–9)。

万延元年 (1860) 10月場所。

(j) 明治42年6月の国技館大相撲土俵入之図。

これらの資料で見る限り，江戸時代と明治時代の勧進相撲の場合，幕内

土俵入りでは行司が先導していないことが分かる[26]。明治17年の３月当時，勧進相撲の幕内土俵入りで行司が先導していなかったと判断したのは，そのような流れが一貫しているからである。江戸時代から明治末期までの勧進相撲で，幕内土俵入りを行司が先導したり，そうでなかったりしていたならば，明治17年３月当時，どうだったかを検討し直さなければならない。

『相撲講本』（S10）には昭和10年のころの幕内土俵入りに関する記述がある。

> 「普通の力士の土俵入りは要するに，その有資格者なることの表示をなすのみにすぎないのである。その方法は下位者より登場し，左より右に円く土俵上に居並び，その殿の最上位者の「シイッ」という警蹲の声にて，柏手その他の式を行うのである。行司は土俵の中央において正面に向かい蹲踞し，柏手のときは団扇を水平に横へその先を左手にて押さえ，力士が力足の型をするとき，左右に房捌きをなし，力士が退場した後，立ち上がって退くのである。」(p. 473)

この中では，行司の先導に関し何も触れていない。行司は先導していたのかどうか，まったく分からない。幕内土俵入りの様子を述べてある本は他にもたくさんあるが，行司の先導に関しては何も言及されていない。これは非常に不思議である。それは何を意味するだろうか。行司の先導がなかったので，それを記述していないだろうか。それとも，先導していたが，記述しなかったのだろうか。判を押したように，幕内土俵入りについて記述してあっても，行司の先導について記述したものがないのである。

８．現在の土俵入り

現在の土俵入りになるまでの経過を調べているうちに，何度か変遷があ

ったことが分かってきた。現在は観客席の方へ向いて立ったり，土俵を一周したり，行司が先導したりしているが，これは，意外と，昭和27年以降に実施されたものである。しかも，それらは同時に実施されたものもあるし，別々に実施されたものもある。昭和27年以前は，一般的にいって，力士は観客席に背を向けて円陣を作り，一連の動作を行なっていた。観客席に顔を向けるようになった年月と行司が先導し始めた年月にポイントを絞り，その経過を調べてみよう。

昭和27年秋場所では，四本柱の撤去に加えて，力士が観客席に向かって立つ新しい土俵入りの形式も導入されている。つまり，これまでは背中を観客席に向けて立っていたが，その秋場所からは顔を観客席に向けて立つようになっている。最後の力士が「警蹕（けいひつ）」の合図を出しながら土俵に上がると，一斉に内側に向き，一連の動作をするのである。これは次の新聞記事で確認できる。

(a) 『朝日（朝刊）』(S27.9.22)。

「従来は丸く（土俵の：NH）内側を向いて並び，大関の『シーシッ』の合図で揃って手を打ち，手を上げたのが，（今場所は：NH）外側を向いているので，この合図がわからずテンデンバラバラ，東西とも不揃いの土俵入りとなってしまった。四本柱と違ってこの方は場内でも賛否こもごもであった。」

(b) 『朝日（夕刊）』(S27.9.22)。

「不評判だった新しい土俵入りはやり方を検討，二日目からまた新しくなった。拡声機の呼出し順で外を向いて円陣になってから一斉に内を向き，これまでのように手を打つようにした。」

(c) 『毎日』(S27.9.23)。

「初日客席に向かってやった十両，幕内の土俵入りは動作がそろわ

ずまずかったが，この日（２日目：NH）は一度客席に向かった後，今まで通り内側を向いてやった。動作が一つで見た目にもきれいで評判が良かった。」

このように，昭和27年秋場所の初日と２日目では所作に違いが少し見られるが，観客席を向くという点では同じである[27]。２日目以降は観客席を向いて立つが，最後の力士の合図で内側を向き，柏手を打っている。これが現在でも続いている[28]。

ただ不思議なのは，昭和27年頃の新聞記事では行司の先導について何も言及していないことである。その沈黙は何を意味するのだろうか。少なくとも二つのことが考えられる。一つは，それ以前から先導が行われていたので，わざわざ言及する必要がなかったことである。もしれこれが正しければ，昭和27年以前に先導が行われていたことになる。それがいつからかはやはり調べ直さなければならない。もう一つは，それまで行司は先導するものだという認識がなく，27年秋場所でもそれがなかったことである。先導していなかったならば，それについて記述こともないのである。もしそれが正しいければ，先導は昭和27年秋場所以降ということになる。

それでは，いつごろから現在の幕内土俵入りのようになっただろうか。土俵を一周して退場するようになったのは，昭和40年（1965）初場所である。それまでは，立っていた位置から思い思いに退場していた。そのため，整然とした退場は見られなかった。土俵を一周するようになった年月は，次の記述でも確認できる[29]。

(a)　『中日スポーツ』（S40.1.11）。

「行司が先導をつとめ，土俵を左へ一周，ゆっくりと間を置いた十両，幕内の新形式の土俵入りも大好評。力士たちは『なんか初めてで，間のびがして，ちょっと変な気持ち…。でもなれたらよくなるだろう

….』とややテレくさそうだった。」

(b) 『サンケイスポーツ』(S40.1.11)。

「この初場所から幕内，十両力士の土俵入りのスタイルが変わった。今までは土俵に上がってそのままの位置で手と切り，横切って土俵を降りたが，今度の新スタイルは土俵上をグルリと一周してから降りることになった。[30]」

(c) 『デイリースポーツ』(S40.1.11)。

「今場所から十両，幕内力士の土俵入りスタイルが新しくなった。従来は二字口から上がってそのまま後の力士を待っていたが，今度はシコ名を呼び上げられて土俵にあがり，先頭者に続いて外側を向き土俵をぐるりと一周する。」

『スポーツニッポン』(S40.1.11) には土俵入りの写真があり，行司は土俵上で力士の先導をしている。[31] その写真には「力士の顔がよく見えると好評の新スタイルの土俵入り」というキャプションがついている。昭和40年初場所の土俵入りで行司の先導を確認できたが，先導がいつから行なわれるようになったかとなると，それを確認できる新聞資料はない。行司が先導している事実は確認できるが，それが「初めて」かどうかは必ずしも分からない。[32]

元木村庄之助（29代と30代）のお話では，いつから先導するようになったかは定かでないが，東西土俵入りを行司一人で引いたことは確かな記憶としてあるという。土俵入りの始まる前，「これから幕内土俵入りを行ないます」というアナウンスがあり，それを聞いて土俵溜りに控えていた行司が土俵上に上がり，中央で蹲踞して力士の登場を待っていた。多くの場合，その任に当たる行司は幕内の初口（つまり，しんがり）だったという。

年月は確認できなかったが，東西の幕内土俵入りで形式が異なったことを元木村庄之助は体験している。これは貴重な情報だった。

『昭和の大相撲』（ティビーエス・ブリタニカ，1989）の中に，昭和40年初場所の幕内土俵入りに関し，次のような記述がある。

「いままでの幕内土俵入りは，力士たちが土俵にぞろぞろ上がり，円陣をつくって，柏手をポンと打ち，化粧まわしの端をつまんで上へ引き上げる動作が終わると，またぞろぞろと土俵を下りた。あまりの簡単さに，客席から笑いが起こるくらいだった。

それが，40年１月場所からは変わった。まず，行司の先導で東方なら東方の全員が花道に並ぶ。場内マイクが地位，しこ名，出身地，所属部屋の順に呼びあげるとひとりひとりが土俵上に上がり，土俵を一周，客席の方を向いて並ぶ。全員そろったところで内側に向き直って，ポンと柏手を打って，化粧まわしの端をつまんで上へ引き上げる。つまり，現在行われている形式になった。」（p. 233）

この記述から，昭和40年初場所に力士は花道で並び，行司が先導したことが分かる。当時の新聞の中には行司が先導している写真を掲載しているものがあるので，それを確認することができた。しかし，行司の先導がこの場所から行なわれるようになったという記事は確認できなかった。29代木村庄之助や30代木村庄之助も年月は定かでないが，部屋別総当たり制の始まったころに，行司の先導も始まった記憶があるという。それまでは，行司は土俵の上で蹲踞し，東西の力士が土俵に登場するのを待っていたとも語っていた。これらを総合すると，行司の先導は昭和27年秋場所から昭和40年初場所までの間ではなく，昭和40年初場所から始まったと判断してよい。

10．おわりに

本稿の冒頭で調べたいことを記したが，まとめると，次のようになる。

(a) 勧進相撲では立行司は帯刀するが，天覧相撲では立行司は帯刀しなかった。なぜ帯刀しなかったかを記した資料がないので，その理由は分からない。

(b) 勧進相撲の取組では麻裃だが，天覧相撲では素袍だった。ただし，最初の16番を裁いた行司は肩衣だった。勧進相撲と天覧相撲では，装束が違う。

(c) 勧進相撲の横綱土俵入りは行司が先導するが，天覧相撲でも同様に行司が先導した。

(d) 勧進相撲の十両土俵入りと幕内土俵入りでは行司は先導しないが，天覧相撲では先導した。勧進相撲では行司が蹲踞し，一人で東西の土俵入りを引いた。

(e) 勧進相撲の幕内土俵入りで行司が先導するようになったのは，昭和40年初場所からである。それまでは，行司が土俵の中央で蹲踞し，一人で東西幕内力士の土俵入りを引いた。観客席の方へ顔を向けて立ち始めたのは，昭和27年秋場所である。それまでは，力は背中を観客の方へ向けて立ち，円陣を作っていた。

(f) 勧進相撲では立行司だけでなく，それ以外の行司も扇子を差さないが，天覧相撲では立行司だけでなく，他の行司も差していた。なぜ扇子をわざわざ差すのかは分からない。扇子が身だしなみの一つなら勧進相撲でも差してよいはずだが，天覧相撲だけに差している。したがって，身だしなみは理由にならない。他に理由があるはずだが，それを記した資料はまだ見ていない。

(g) 勧進相撲では麻裃を着ている場合，横綱土俵入りでは烏帽子を被らな

いが，素袍に烏帽子で横綱土俵入りを引く場合もときどき見られる。何か「記念」すべきイベントの場合に行なわれる土俵入りに違いないが，どういうイベントがそれに相当するかは分からない。明治43年５月の行司装束改正後には，直垂に烏帽子となったので，横綱土俵入りの装束は取組の場合と同じである。

本稿では，事実の確認はある程度できたが，なぜそのような事実になったかは必ずしも分からなかった。事実の背後にある理由づけを記した資料がないためである。もしそのような理由を解明しようとすれば，まず，資料を見つけることである。しかし，そのような資料が見つかるかどうかは分からない。これを求めようとすれば，今後の研究に俟つほかはない。

注

1）現在の行司に関しては，４名の木村庄之助（29代，30代，33代，35代）と式守錦太夫（幕内筆頭）にお世話になった。ここに改めて，感謝の意を表したい。特に立行司が扇子を差さないことは再確認できた。明治10年代までの錦絵の中には，立行司が腹帯に扇子を差している姿を確認できるものある。もしかすると，現在も立行司が取組の際，扇子を懐に差しているかもしれないと思っていたが，元立行司に確認したところ，差していないとのことである。

2）明治３年12月に庶民の帯刀を禁止し，明治４年８月に散発脱刀令が出されているが，行司は依然として帯刀していた（『読売』（M30.2.15））。明治９年３月の廃刀令が行司の帯刀に影響を与えている。

3）酒井著『日本相撲史（中）』（pp.56-8）にその相撲に関し短い記述がある。

4）この『日日』（M14.5.14）の記事は『日本相撲史(中)』（pp.56-8）にも引用されている。

5）この扇子のデザインは，明治11年１月の日付がある錦絵「境川横綱土俵入」で式守伊之助が持っているものと同じである。

6）『相撲ものしり帖』（p.207）によると，明治17年の錦絵となっている。明治17年６月にもなって，帯刀していないのは不思議だ。

7）庄三郎が明治17年３月の時点で草履を許されていないということはないはずだ（『相撲道と吉田司家』の「御請書」（p.127））。番付から判断すると，明治14年１月場所には草履を履いている。明治17年４月の届け日が正しければ，絵師は庄三郎の草履

を正しく描いていないことになる。絵師の国利は行司の着用具にも詳しいはずなので，なぜ庄三郎が無草履で描かれているか不思議だ。そう描く何か理由がありそうだが，思い当たるものがない。明治17年の日付がある錦絵では，ほとんどすべてと言っていいくらい，庄三郎は草履を履いて描かれている。因みに，庄三郎は明治18年５月に15代庄之助を襲名しているが，先代の14代庄之助は明治17年８月に亡くなっている。

８）この錦絵の届け日は不明瞭だが，「明治10年代」であることは明白だ。「明治1？年」とあり，「１」は確認できるからである。「？」の部分は欠けていて，確認ができない。

９）この行司が14代木村庄之助であれば，明治17年当時，紫房だったかどうか必ずしも定かでない。朱房で描いてある錦絵もある。『吉田司家と相撲道』の「御請書」によれば，紫房であってもおかしくないが，それを裏付ける資料はまだ見ていない。

10）西ノ海と大鳴門の取組を描いた錦絵は高橋・北出監修『大相撲案内』（S54，p.121）でも見られる。この錦絵では，木村庄之助は烏帽子着用で，草履を履いているが，扇子を差している。

11）３代与太夫が，８代伊之助（M17.5～M31.1）を襲名。天覧相撲には伊之助では登場していない。しかし，与太夫が伊之助を継ぐことは，16年中に決まっていた（『読売』（M30.9.24））。

12）勧進相撲で，行司が帯剣していない錦絵がある。たとえば，明治17年６月届けの「大達と梅ケ谷の取組」（『相撲百年の歴史』（p.101））では，庄三郎が扇子だけでなく，小刀も差していない。おそらく，小刀は裾でボカされているに違いない。明治17年当時の「勧進相撲」では，立行司は帯剣していたからである。

13）烏帽子は確かに天覧相撲とそうでない相撲を見分ける要素の一つだが，それだけでは不十分である。勧進相撲の横綱土俵入りでも特別な場合，行司は烏帽子を被ることがある。どのような土俵入りが「特別なもの」なのかに関しては，今のところ，具体的には分からない。

14）明治17年３月の天覧相撲の模様は当時の新聞にも報道されている（『東京横浜毎日』／『郵便報知』／『絵入朝野』（M17.3.11）が，松木著『角觝秘事解』（M17）にかなり詳しい説明がある。この天覧相撲を記述した本はその後たくさんあるが，その記述は松木著『角觝秘事解』に基づいている。しかし，岡編『古今相撲大要』（M18）には松木著『角觝秘事解』（M17）にない決まり手が新しく補充されている。

15）同じ趣旨の記事は『読売』（M17.2.23）などでも見られる。

16）庄三郎が熨斗目麻上下を着用していたことは，たとえば，『角觝秘事解』（M17，p.12）や『角力雑誌』（S10.10）の「お濱離宮の天覧角力」（p.6））などでも確認できる。この装束から，庄三郎は「立行司」の地位にあったことが分かる。

17）土俵上ではなく，力士や年寄の独り立ちを描いた錦絵では帯剣を共に扇子も手に持っているものがたくさんある。扇子は身だしなみの一つになっている。一般的に

は，扇子は外から見られないくらい懐の中に差し込んであり，扇子を持っているか否かは分からない。

18）現在の烏帽子は便宜的に「侍烏帽子」，天覧相撲の烏帽子は「風折烏帽子」とそれぞれ呼ぶことにする。その区別をしない場合は単に「烏帽子」と呼ぶことにする。

19）立行司の太刀の中身は竹光だとしているが，それを確認できる資料はない。廃刀令後，行司は真剣を許されていないはずだと推測しているに過ぎない。

20）素袍烏帽子はコップ型の格好で，頭から落ちないように紐で顎に縛る。その見本は16代木村庄之助の写真でよく見られるものである。

21）文献の中にはときどき，国技館開館以降，横綱土俵入りでは立行司が烏帽子を被り，素袍を着るようになったという記述がある。それが事実なら，それは1年ほどでなくなったことになる。国技館開館は明治42年6月，行司装束改正は明治43年5月だからである。そのとき，立行司でも烏帽子・直垂になった。国技館開館前でも，立行司は特別な横綱土俵入りでは烏帽子を被り，素袍を着用することがあった。麻裃着用で横綱土俵入りを引くのが普通だったが，その場合は，もちろん，頭に何も被らなかった。因みに，裃を着用するときは，烏帽子は被らない。

22）これについては，拙稿（2010）でも触れている。『南撰要類集』以外には行司の先導を記述していないので，それが真実かどうかは他にもそれを裏付ける資料がないか，もっと調べる必要があるかもしれない。

23）酒井著『日本相撲史（中）』（pp. 77–8）にもその相撲に関し短い記述がある。

24）江戸時代の錦絵を見る限り，幕内土俵入りの行司は土俵の北側に背を向け，南側に顔を向けた姿で蹲踞している。土俵の中央で北向きに蹲踞しているのではなく，勝負土俵の端の方で蹲踞している。この様式は，おそらく，明治42年6月の国技館開館時まで続いていたはずだ。江戸時代から明治42年まで，行司溜りは土俵の北側にあった。行司はそこから土俵に上がり，土俵の端で待機したに違いない。土俵の中央で待機するようになったのが明治42年6月なのかどうかは，まだ資料で確認していない。因みに，江戸末期の錦絵では北か南の方向を確認するには，二通りある。一つは，幕府の見張り役の塔（つまり「役座敷」）が描かれていたら，そこが南側である。そこから見た方角が北側となる。もう一つは，四本柱の色である。黒色と緑色で描かれている方角が北側である。四色の位置が現在も昔も変わらない。

25）寛政3年6月の上覧相撲の幕内土俵入りでは行司が先導している。力士は東西3組ずつに分けられ，「御前掛り」という様式で土俵入りをしている。それは上覧相撲の模様を記述してある写本等で確認できる。横綱土俵入りでは，横綱の前後にはそれぞれ力士がいたが，後ろの力士が太刀を携帯していたかどうかははっきりしない。横綱が一人土俵入りをしている間，二人の力士は土俵下で控えていた。

26）明治43年1月9日，台覧相撲が行なわれているが，東方幕内土俵入りでは与太夫，そして西方幕内土俵入りでは勘太夫がそれぞれ先導している。天覧相撲であれ台覧相撲であれ，御前相撲の幕内土俵入りでは行司が力士の先導をする。

27）観客席の方へ顔を向けて立った年月に関しては，文献によって異なる場合がある。その原因の一つは，誤解を招くような表現にある。たとえば，『近世日本相撲史（３）』の口絵のキャプションには，初日は観客席に顔を向けて立ったが，所作が不揃いだったため，２日目からは従来通り内側に向いたとある。あたかも２日目以降は，観客席に顔を向けなかったような記述である。しかし，実際は，２日目以降も観客席を向いて立ち，最後の力士が土俵上に上ったとき，その力士の警蹕で土俵の内側に向き直ったのである。その後，従来通り，柏手を打ち，一連の動作を行なっている。また，行司が先導を始めた年月に関しても異なる記述がいくつかある。本稿でも，状況証拠から昭和40年初場所だとしているが，当時の新聞や雑誌などではそれを直に確認していない。

28）行司が幕内土俵入りをいつ先導するようになったかについて現立行司（35代）だけでなく元立行司（27代，29代，30代，33代）にも尋ねたが，確かな年月は確認できなかった。記憶があいまいで分からないらしい。29代木村庄之助と30代木村庄之助のお話から昭和27年初場所と昭和30年代初期の間らしいということは分かった。というのは，自分たちが現役のころ，土俵溜りで幕内土俵入りのアナウンスを待ち，その後，土俵の中央に上がり蹲踞して力士の登場を待ったことがあったと語っていたからである。

29）土俵をグルリと一巡し始めたことは，部屋別総当たり制と共に，昭和40年１月当時のほとんどのスポーツ新聞で報道されている。しかし，行司が先導していたことを記述している新聞は非常に少ない。なお，ときどき，行司が先導し，土俵を一巡する形になったのは昭和48年９月だったという記述をしている文献があるが，これは何かのミスである。

30）初場所２日目の十両土俵入りで木村義雄は左回りするところを右回りした。後に続いていた力士たちも行司に続いて右回りをするというハプニングがあった。これは，29代庄之助によると，偶数日を奇数日と勘違いし，足の踏み出す方向を間違えたためらしい（2010.1.18）。

31）『大相撲』（S40.2，p.90）にも力士が観客席を向いて立ち，行司が中央で蹲踞している写真がある。その写真では，行司が先導してきたかどうかは分からない。このような写真は昭和40年初場所以前の雑誌等でも見られる。本場所で行司が先導している写真は，『スポーツニッポン』（S40.1.11）にも掲載されている。もちろん，御前相撲のような天覧相撲や台覧相撲では，幕内土俵入りでも行司が先導するので，行司の先導を写した写真はあるかもしれない。

32）行司の先導が昭和40年初場所でなければ，昭和27年秋場所と昭和40年初場所の間である。元庄之助のお話では，組合ごとに行なわれていた昭和32年ごろまでの巡業では行司が中央で蹲踞して土俵入りを引いた記憶があるという。そうなると，昭和33年以降の可能性が残ることになる。本稿では，昭和40年初場所で行司の先導は始まったことにしている。というのは，当時の新聞記事で行司の土俵入りが新形式に

なり，行司が先導したことを記しているからである。

参考文献

ここで記載した文献以外にも，明治期の新聞や相撲関係の雑誌『野球界』，『相撲と野球』，『相撲』，『大相撲』等を参考にした。

荒木精之，昭和34年，『相撲道と吉田司家』，相撲司会。
池田雅雄，昭和45年，『相撲百年の歴史』，講談社。
池田雅雄，1977，『相撲の歴史』，平凡社。
池田雅雄，1990，『大相撲ものしり帖』，ベースボール・マガジン社。
『江戸相撲錦絵』（VANVAN 相撲界新春号），昭和61年１月，ベースボール・マガジン社。
『大相撲』，昭和52年，学習研究社．（学研『大相撲』）として記す。
『大相撲人物大事典』，2001，『相撲』編集部，ベースボール・マガジン社
『大相撲80年史』，平成17年，日本相撲協会広報部・相撲博物館企画・編集。
岡敬孝編，明治18年，『相撲大要』，報行社。
風見明，2002，『相撲，国技となる』，大修館書店。
『木村瀬平』（雪の家漁叟記），明治31年．（小冊子で，発行元不明）。
上司信貴，明治32年，『相撲新書』，博文館／復刻版（昭和60年），ベースボール・マガジン社。
金指基，2002，『相撲大事典』，現代書館。
酒井忠正，昭和39年，『日本相撲史(中)』，ベースボール・マガジン社。
式守伊之助（19代），『軍配六十年』，高橋金太郎。
ジョージ石黒，1994，『相撲錦絵蒐集譚』，西田書店。
『昭和大相撲史』，昭和54年，毎日新聞社。
『相撲浮世絵』(別冊相撲夏季号)，昭和56年６月，ベースボール・マガジン社。
『相撲浮世絵―大谷孝吉コレクション』（改訂版），平成８年，大谷・三浦編，大谷孝吉（発行者）。
『古今相撲大全』（木村政勝著），宝暦13年，写本／『今古実録相撲大全』（木村清九郎撰，明治17年）。
『相撲の歴史』，1998年３月，堺市博物館制作，境・相撲展実行委員会。
高橋義孝・北出清五郎監修，昭和54年，『大相撲案内』，グラフ社。
根間弘海，1998，『ここまで知って大相撲通』，グラフ社。
根間弘海，2005，「軍配房の色」『専修経営学論集』第81号，pp.149-79。
根間弘海，2006，『大相撲と歩んだ行司人生51年』（33代木村庄之助と共著），英宝社。
根間弘海，2007，「行司と草履」『専修経営学論集』第84号，pp.185-218。
根間弘海，2006，「幕下格以下行司の階級色」『専修経営学論集』第84号，pp.219-40。
根間弘海，2009，「行司の短刀」『専修人文論集』第84号，pp.283-311。

根間弘海，2009,「短刀は切腹覚悟のシンボルではない」『専修人文論集』第85号，pp. 117–51。

根間弘海，2010,『大相撲行司の伝統と変化』，専修大学出版局。

根間弘海, 2010,「草履の朱房行司と無草履の朱房行司」『専修経営学論集』第91号, pp. 23–51。

根間弘海，2010,「上覧相撲の横綱土俵入りと行司の着用具」『専修経営学論集』第91号，pp. 53–69。

『古事類苑』の「武技部17–20」，昭和35年，吉川弘文館。

古河三樹，昭和17年,『江戸時代の大相撲』，国民体力協会。

松木平吉，明治17年,『角觝秘事解』。